

~~~~~  
 地域レポート  
 ~~~~~

## 子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査） の概要と進捗状況について

南九州・沖縄ユニットセンター  
 琉球大学(沖縄)サブユニットセンター  
 琉球大学大学院医学研究科  
 育成医学講座 知念安紹

近年、人類の経験したことのない速さで科学・技術が発展し、私たちの生活は様々な面で大変便利になりました。それらの技術革新にともなって、食生活や住環境も変わり、さまざまな化学物質も身の回りに氾濫するようになりました。国内では小児喘息や肥満、精神・行動障害の受療率が増加しているという報告があります。国内外で、子どもに対する環境リスクが増大しているのではないかとの懸念があり、1997年に米国マイアミで開催されたG8環境大臣会合において「子どもの健康と環境」に関する宣言が発出されました。その後、2009年にイタリアのシラクサで開催されたG8環境大臣会合において、この問題の重要性が再認識され、各国が協力して取り組むことが合意されました。本邦では2006年8月「小児の環境保健に関する懇談会」にて今後推進すべき施策の方向性が提言され、2007年10月「小児環境保健疫学調査に関する検討会」、2008年3月環境中の化学物質の影響を検出することができる大規模な新規出生コーホート調査の立ち上げが提言され、環境省は2008年4月「小児環境保健疫学調査に関するワーキンググループ」を設置し、2010年3月「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」(Japan Environment & Children's Study)基本計画を作成・公表し、エコチル調査を開始することとなりました。

エコチル調査とは環境省が実施する国家プロジェクトであり、独立行政法人国立環境研究所がコアセンターとして研究全体を取りまとめ、独立行政法人国立成育医療研究センターが医学に関する専門的知見を有するメディカルサポートセンターとしてこれ

を支援します。全国で15か所の大学、研究機関等がユニットセンターを立ち上げ、各地区で調査対象者のリクルートやフォローアップを担当しています。我々の参加している琉球大学の3講座（育成医学：太田孝男/センター長、衛生学・公衆衛生学：青木一雄/調査責任者、女性・生殖医学：正本仁/地域責任者、育成医学：知念安紹/地域責任者）は南九州・沖縄ユニットセンターに属しております。

調査目的は「胎児期から小児期にかけての化学物質曝露が、成長や発達を示している子ども達の健康に影響を与えているのではないか」という中心仮説を検証するものです。特に化学物質の曝露や生活環境が、胎児期から小児期にわたる子どもの健康にどのような影響を与えているのかについて明らかにし、化学物質等の適切なリスク管理体制の構築につなげることにあります。また、この中心仮説に基づく種々の仮説を明らかにするためには、化学物質の曝露以外の要因についても併せて検討を行う必要があります。解明すべき要因としては遺伝要因、社会要因、生活習慣要因等が想定されます。健康影響の指標として多岐にわたり以下のように設定しています。＜1＞身体の成長：出生時体重、出生後の身体の成長発育状況（運動機能/腎機能/肺機能）＜2＞先天奇形：尿道下裂、停留精巣、口唇・口蓋裂、消化管閉鎖、心室中隔欠損、染色体異常等＜3＞性分化の異常：性比の偏り、性器形成障害、脳の性分化等＜4＞精神系発達障害：自閉症、学習障害、注意欠陥・多動性障害等＜5＞免疫系の異常：アレルギー、アトピー、喘息等＜6＞代謝・内分泌系の異常：耐糖能異常、肥満、生殖器への影響等

<7>小児腫瘍 <8>妊娠の異常：流産、早産、死産、胎児発育不全、妊娠高血圧症候群等

調査方法は、コーホート研究により、環境要因とそれらに関連すると考えられる健康影響を、子どもの成長と共に経時的に観察していきます。出生前に父母の採血を行い、出生時に臍帯血や毛髪の採取を行い、その後半年に一回、質問票に記載して頂きます。今後予定している詳細調査では、甲状腺ホルモンやアレルギー検査、ハウスダスト、空気汚染物質、環境騒音などの測定を予定しています。調査規模は全国で10万人を目標としています。平成25年1月31日時点では57,754人の参加者数となっています。調査期間は21年間（リクルート3年、追跡13年、解析5年）で、追跡期間は妊娠中から子どもが13歳の誕生日を迎える期間までです。エコチル調査のリクルートは2011年1月24日に開始し、その後、2011年3月に福島第一原子力発電所事故が発生し、放射線の健康被害に対する国民の不安が高まったため、福島ユニットセンターの調査地区を拡大しています。追跡率は、フォローアップ期間終了時に80%以上を目標としています。

南九州・沖縄ユニットセンターの中で沖縄県の調査対象地域は宮古島市で県/市福祉保健部・県立宮古病院・奥平産婦人科のご協力のもと、調査地区に居住し将来的にも同場所に居住することが予定される妊婦を対象に900名の参加人数予定しており、現在585名（平成25年2月28日時点）に参加いただいています。また里帰り分娩のため一時的に調査対象地区の宮古島市から沖縄県本島の医療機関にて出産することを想定して、平成24年9月28日沖縄ポートホテル（那覇市）にて沖縄サブユニット高次

医療機関連絡調整会議を実施しました。沖縄県立中部病院、沖縄県立南部医療センター・こども医療センター、那覇市立病院、沖縄赤十字病院の先生方に参加していただき、ご協力をいただいております。

エコチル調査2周年記念シンポジウム（平成25年1月）では調査の途中経過が発表されました。妊娠初期に喫煙をしている妊婦が各年代4～9%であること、妊婦が若いとそのパートナーの喫煙率が高い、妊娠中期～後期に飲酒している妊婦が各年代3～5%であること、体重増加が適正範囲にいる妊婦が5割程度、不妊治療は6%程度、マグロやカツオを食べる機会が多いユニットセンターは沖縄県や高知県などと、疫学的調査の結果が公表されています。今後、さらなる情報の蓄積により期待される成果として以下の4つ（①小児の健康に影響を与える環境要因の解明 ②小児の脆弱性を考慮したリスク管理体制の構築 ③次世代の子どもが健やかに育つ環境の実現 ④ライフサイエンス分野の国際競争力の確保）が考えられています。21年間の長期にわたるコーホート調査であり、必然的に調査協力担当メンバーも変わっていきます。今後とも皆様のご理解とご協力の程よろしくお願い申し上げます。

#### <ホームページ>

エコチル調査（環境省）：

<http://www.env.go.jp/chemi/ceh/index.html>

南九州・沖縄サブユニットセンター：

<http://www.ecochild-minamikyushu.jp/index.php>

沖縄サブユニットセンター：

<http://www.ecochild.med.u-ryukyu.ac.jp/>

~~~~~  
 地域レポート  
 ~~~~~

## 沖縄県臨床心理士会による避難者支援活動

沖縄県臨床心理士会被害者支援担当理事  
 琉球大学教育学部 生涯教育課程 心理臨床科学コース  
 准教授 伊藤 義徳

### I 沖縄県臨床心理士会による避難者支援

東日本大震災による沖縄県への避難者は、震災直後から右肩上がりに増え続け、H25年1月17日現在、1,056名に上っている<sup>1)</sup>。放射性物質は年齢が低いほど影響が大きいといわれるため<sup>2)</sup>、小さな子どもを抱えた母親が、子どもを守るために全く身寄りのない沖縄で苦勞しながらの子育てを余儀なくされている。もちろんそれ以外にも、致し方ない事情を抱えた避難者が数多くおられることを知った我々は、沖縄県臨床心理士会被災者支援対策本部をH23年7月19日に組織し、我々に出来る避難者支援活動を模索し始めた。そして、沖縄東日本大震災支援協力会議の「東日本大震災被災者支援活動助成事業」の助成を受け、主に2つの活動からなる支援活動を開始した。1つは、「こころのコリをほぐす会」である。これは1つの会場へ避難者に集まっていただいで支援を提供するものである。もう1つは、「訪問個別相談」活動である。沖縄は鉄道がなく坂道も多い事から、自家用車を持たない避難者にとっては大変不便な土地柄といえる。そこで、避難者の自宅などに臨床心理士を派遣して、相談の場を提供するのである。以下に活動の詳細と、そのときの様子を紹介する。

### II こころのコリをほぐす会

こころのコリをほぐす会（通称コリ会）は、H23年度に2回、H24年度に2回開催した。臨床心理士が背伸びをせず、普段の活動を活かして提供できるものとして、「からだほぐしの場」「おしゃべりの場」「個別相談の場」「子どもの遊び場」という4つのコーナーを設けた。日曜日の午後3時間、始め

に臨床心理士という職業やストレスに関する心理教育を行う時間を1時間程度行った後、残りの2時間は参加者がどこの場でも自由に訪れて楽しんでいただく形式を取った。

H23年10月16日（日）沖縄県立南部医療センター・こども医療センター講堂にて、特定地域からの避難者を対象とした第1回目のコリ会が開催された。18名の臨床心理士も参加者も、当初は同じように緊張の面持ちであったが、そんな雰囲気を一掃してくれたのが子ども達であった。子どもの遊び場においてあるおもちゃや人形を見ると銜<sup>てら</sup>いなく手に取り、好きに遊び始める。その動きに引っ張られるように支援員も動き出し、子ども達が遊び始めるのを見て、大人達もやっと一息ついて腰を下ろした。子どもの数が増えるにつれて遊びの勢いも増し、心理教育を始める頃にはマイク無しでは声が通らない程の賑わいであった。

印象深い出来事があった。大はしゃぎで汗だくの小学生の男の子に、水分を摂らせようとお茶をコップに注いで渡すと、なぜか躊躇している。するとこの子の母親が慌てて駆け寄ってきて「そのお茶の（茶葉の）産地はどこですか？」と尋ねた。我々ははっとした。少し前に、静岡産の茶葉から放射性セシウムが検出されたと報道があった時期であった。よかれと思って用意したお茶菓子であったが、気配りが足りなかったことに気づかされた。こうした配慮の足りなさが、無自覚のうちに避難者を傷つけることがあると思うと怖くなった。

この日は17組41名の参加者が集い、幸いにして盛況の様相であった。全ての参加者にアンケートで「満足した」と回答をいただき、4つ全ての場に対

して賛辞をいただくことが出来た。これに気をよくして10月30日(日)の会では、29名の臨床心理士をそろえ万全の体制で臨んだが、ふたを開けてみると4組9名の参加にとどまった。理由は不明だが、この日が丁度地域小学校の運動会や大きなお祭りに重なったこと、情報宣伝が足りなかったことなどが主な要因と考えられる。宣伝をして来場者を待つ「受け身」の活動の難しさを思い知った。とはいえ、この2回の活動を通して合計6組の方から訪問個別相談の要望があった。今度はこちらから支援を届ける、「能動的な」支援活動の番である。

### Ⅲ 訪問個別相談

日程の都合や故郷に戻られる方もあり、最終的に訪問個別相談を利用されたのは3組の避難者であった。避難者のご自宅を訪れるアウトリーチ支援というのは、どこにも前例がない。我々は思案して、2名1組での派遣員と、専用電話で派遣員の後方支援をする待機員1名を含めた、計3名による支援チームを作って訪問個別相談に臨んだ。相談は月に1回程度、より密なケアや長期にわたるケアが必要と判断される場合には、無理をせず近隣の医療機関を紹介することを確認してスタートした。

利用者のうち2組は、小学生以下の子どもを抱えて母子で避難されているご家庭であった。いずれもご自宅で、派遣員のうち一人が母親の話をうかがい、もう一人が子どもの遊び相手をしながら様子を観察した。やはり今現在の心配事として大きいのは子どもに関する事であった。特に新しい学校になじむまでの期間は大変だったとのこと。沖縄の子ども達はよく言えば素直で「子どもらしい」のが一般的な特徴といえるが、反面ストレートに気持ちを表現し、方言も相まって言葉が強い印象を与えるようである。そうした文化の違いが子ども達にはたえられないのか、登校前に「学校に行きたくない」と言ったり体調不良を訴えることもあったそうである。さらに、「子どもらしい」という表現を超えて、いじめと捉えられる言動もあったとのこと。「放射能がうつる」といった誹謗中傷や、自宅前で悪口を言って逃げる等のいたずら行為があったと聞かされ、派遣員は胸が張り裂ける思いであった。すぐさま市教育

委員会や地域スクールカウンセラー(臨床心理士)を通して学校に情報提供し、事態の收拾を依頼したが、これも沖縄の特徴なのか、「悪気があって言っているわけではないのだから大目に見てあげて。言われる側も強くなれない」という反応で、十分対応してもらえなかった。被害者の親もそれ以上声を荒げることはせず、「今は子どもが頑張っているからそれを支えたい」とのこと。避難者の弱い立場を理解してもらえない対応に落胆すると共に、こうした不理解が横行する中で生活しなくてはならない避難者の苦しみを痛切に感じた。避難者がどうにか関わらず、被害者の辛い心情を第一に考えつつ、一方で加害者をただ叱るのではなく成長させるための指導は出来ないものか、我々一人一人が考えるべき問題である。

### Ⅳ これからの支援

今年度も上記のような「コリ会」を開催したが、前にも増して人が集まらなくなっていた。その理由として、避難者自身による自助グループが本格的に活動をし始めたことが挙げられる。その1つが、福島からの避難者を中心に運営される「福島避難者のつどい～沖縄じゃんがら会～<sup>3)</sup>」である。そこで今年度は、じゃんがら会と共催する形でコリ会の様な会を持つ取り組みを行っている。こうすることで、事前に参加人数も把握できるし、事前にニーズなども確認出来るため、効率のよい支援が出来る。この様にして、H24年10月21日(日)(参加者43名、支援者25名)、11月17日(土)(参加者26名、支援者25名)、「からだところをほぐす会」という名称で会を持つことが出来た。

この会を持って痛切に感じたことは、避難者の苦悩は日々変化しているということである。例えば、多くの方が共感する最近の悩みとして、故郷に戻る度に、「いつ帰ってくる」「沖縄にいる必要がどこにある」と詰問され、いくら避難の重要性を説明しても理解されず、最近では連絡も途絶えがちになっている、というものがあつた。被災地に「残ったもの」と「離れたもの」の間に溝が生まれつつあるのである。避難者自身も「逃げた」罪悪感に苛まれているのに、それを故郷の頼るべき人々から直接ぶつけら

れるのは、どんなに辛いことであろうか。沖縄に居場所はない、でも故郷にも戻れない、そんな孤独感が避難者の心に大きな影を落としているのである。H24年11月に行われた東日本大震災支援協力会議による避難者対象アンケートでは、51%の避難者が、帰郷をあきらめこのまま沖縄で生活することを考えているそうである<sup>4)</sup>。しかし、こうした回答を読み解く際には、必ずしも沖縄を気に入ったからという理由だけでなく、「帰るに帰れない」辛い選択があった可能性も念頭に置くべきである。その他、避難されてくる方の数は今も増え続けている。比較的初期に沖縄に避難されて来た方は、すでに1年半以上の沖縄生活の中で、様々な苦勞を乗り越えながら互いに支え合える仲間を見つけ、沖縄の地で新たなコミュニティを獲得しつつある。しかし、一方で最近になって漸く避難の決断を固めた方々の中には、そうした先駆者達にも温度差を感じてうまくなじまず、より孤独感を深めている方もいるそうである。そこには、先駆者達が抱えてきた苦惱の上に、避難が遅れたことへの後悔や、避難者を受け入れるムードが一段落した（ように感じられる）沖縄で、

一から理解を求め受け入れてもらう努力をせねばならない負担感がのしかかってくる。この様に、避難者の苦惱は日々変化し、多様化しつつあるのである。そうした変化を敏感に察知しながら、一方で、時がたつにつれて「避難者支援」に馴れつつある我々自身にも自覚の目を向けつつ、これからも支援を続けていきたい。大事なことは、震災による苦惱は時間がたつにつれて薄れていくのではなく、今でも日々新たに生まれているという認識である。

#### 引用文献

- 1) 復興庁 被災者支援班. 全国避難者等の数（所在都道府県別・所在施設別の数）H24年11月7日. 復興庁 2012
- 2) 歴史教育者協議会. 中・高校生と学ぶ福島原発事故と放射能Q&A. 平和文化. 2012
- 3) 福島避難者のつどい～沖縄じゃんがら会～（ブログ）[http://jan\\_gara.net/archives/category/newinfo](http://jan_gara.net/archives/category/newinfo) 2013年2月1日現在
- 4) 東日本大震災支援協力会議. 平成24年度東日本大震災支援協力会議第1回総会資料. 2013